

征夷大將軍源義仲と入道前関白松殿基房

武 久 堅

はじめに

入京した義仲に親身に接した貴族は皆無に近かったが、その数少ない一人に、入道前関白松殿基房がある。寿永二年秋から冬、明けて三年春への、短すぎた京洛での義仲の命運の軌跡に、平家と衝突した「殿下乗合」以降の松殿基房の動向を重ねて、目途を誤って義仲に賭けた、この欲得尽の摂関家次男のたどる、一家衰亡への縮図を描きたい。延慶本平家物語では第四（第八分冊）から第五本にかけてである。

一 松殿と義仲の邂逅

法住寺合戦を征して法皇を五条内裏に押し込め、取り込めた捕虜たちをも嚴重に囲繞して憚らなかった義仲に、入道前関白基房のみが接近して懇切な教訓を垂れ、これが功を奏して、法皇の解放に導いたと、延慶本平家物語は第四の卅六「木曾、入道殿下ノ御教訓ニ依リ法皇ヲ宥シ奉ル事」で語っている。前入道殿下が、清盛の所業と天罰を引き合いに出して義仲を訓戒するこの場面を、延慶本は次のように叙述している。

征夷大將軍源義仲と入道前関白松殿基房

木曾ハ五条内裏ニ候ヒテ、稠シク守リマイラセケル間、公卿殿上人一人モ参ラズ、合戦ノ日生虜ニシタリシ人々ヲモ免サズ、猶イマシメ置キタリシカバ、前入道殿下、内々木曾ニ仰セラレケルハ、「カクハ有ルマジキ事ヲ。僻事ゾ。ヨクヨク思惟アルベシ。故清盛ハ神明モ崇メ奉リ、仏法ニモ帰シ、希代ノ大善根ヲモアマタ修シタリシカバコソ、一天四海ヲ掌中ニシテ、廿余年マデ持チタリシカ。大果報者ナリキ。上古ニモ類少ナク、当代ニモタメシナシ。夫ガ法皇ヲ悩マシ奉リシニヨリ、天ノ責ヲ蒙リテ忽チニ滅ビニキ。子孫又絶ハテヌ。恐レテモ恐ルベシ。敬ヒテモ敬ヒ奉ルベシ。只悪行ヲノミ好ミテ、世ヲ持ツ事ハ少キゾ。宥シ奉ルベシ」ト仰セラレケレバ、誠メ置キタル人々ヲモ免シ、稠シカリツル事共モ止メテケリ。物ノ心モ知ラヌ夷ナレドモ、カキクドキ細カニ仰セラレケレバ、靡キ奉リケリ。

ここにいう「五条内裏」について、兼実は『玉葉』寿永二年十一月廿日、即ち法住寺合戦翌日の日記に、

伝へ聞ク。入道関白、去夜ヨリ五条亭ニ参宿、義仲、迎へ寄スト云々。

と記している。松殿は合戦当夜に、法皇の押し込められた「五条亭（摂政基通の邸宅で基通は南都へ避難中）」へ、義仲から呼び寄せられて参宿していたことになる。義仲入京以来の入道関白の動向は後述するが、ここに設定されている訓戒の場面も、場所が「五条亭」であるということ、未だ公卿たちは捕縛中という状況から、合戦直後のことと解される。公卿の捕縛については、同じ『玉葉』十一月廿日に、後に聞くとして、院側近の雅賢、資時が武士に搦取られていたことが記されている。翌廿一日に兼実は、定能が参院したこと、親信が入れ替わり退出したこと、前日には静賢法印が院に見参したこと、を記しているから、「公卿殿上人一人モ参ラズ」は実態より厳格な状況設定になっている。同日に兼実は静賢からの情報を、詳しくはないがと断って、

義仲、内々示シテ言フ。「世間ノ事、松殿ニ申シ合ハセ、毎事ク沙汰致スベシ」ト云々。

と記している。合戦後の義仲と松殿の結託は既に出来上がっていた路線であつたらしい。そこで松殿の訓戒の内容が検討されねばならない。

問題は松殿の清盛評価の文言である。清盛の「神明崇拜」「仏法帰依」「希代の大善根」は、清盛から官位を剥奪されて左遷を被り入道関白に身を転じた元関白基房としては、いかに義仲説得という文脈中の発言としても過剰贅辞である。これらは平家物語の清盛没後の追悼物語群からのキーワードの抜粹と解される。「一天四海の掌握」「大果報者」「上古に類無く」「当代例無し」もいずれも、物語の組み立てた清盛物語を下敷きにしている。ここで一転して法皇の鳥羽殿幽閉とおぼしい事件に言及し、「天の責め」を被り「忽ちに滅ぶ」へと続く。ここまでは清盛批判の例示として妥当であるが、そこに続く「子孫又絶え果てぬ」とまで言うのは、都落ちしたとは言え、この段階での平家の現状認識として明らかに行き過ぎである。後代になって物語作者の意図に沿って作り直された訓戒の言葉伝承と解される。実態はもう少し簡潔、簡素であつたろう。物語は、これを聞いた義仲の反応を次のように記している。

「入道殿ヲコソ親[、]ト憑[、]ミ申シタレ。親方[、]ノアラム事ヲ、子トシテ背クベカラズ」ト云フ。事ヨゲナルゾヲカシキ。

義仲をして入道松殿を「親[、]ト憑[、]ミ」「親方[、]」と語らせ、「子トシテ」と、義仲の基房との関係を自白させている。「事ヨゲナルゾヲカシキ」は物語作者の、この言動に対する義仲批評である。こうして十二月一日には、大乱以後召し込められていた大式実清卿、雅賢朝臣、資時朝臣等が釈放され、法皇は五条内裏幽閉を解かれ、五条殿の怪異を理由に

大膳大夫業忠の六条西洞院邸宅への移動が決まり、法皇には新御所となりかつ終の住処ともなる（『吉記』）。

物語の展開ではこれより前、法住寺合戦により、実権掌握を果たした義仲は、いち早く摂政近衛殿基通の任を解き、松殿の三男、十二歳（延慶本は十三歳とする）の大納言師家をして、後徳大寺内大臣実定からの「借の大臣」により、「内大臣」の地位を得させ、この強引な手続きを経て師家に「摂政ノ詔書」が下され、義仲本人は「院ノ御厩ノ別当」に押し成り、公卿五人を含む四十九人の解官を断行するに及んでいた。延慶本の

第四・廿九「松殿御子師家ヲ摂政ニ成シ給フ事」

三十「木曾、公卿・殿上人四十九人ヲ解官スル事」

の二章である。いかにも無謀な義仲の政權奪取であり、この専断を戒めた、摂政師家の後見人入道松殿からの、義仲への訓戒であった。

ところで、語り本の「屋代本」「覚一本」には、この「師家摂政」と「四十九人解官」の記事の間に、

（屋代本）（義仲は）院ノ御厩ノ別当ニ推シ成リテ、丹後ノ国ヲゾ知行シケル。松殿禪定殿下ノ御聲ニ押シ成リテ、同キ廿七日、三条中納言知賢以下、卿上雲客四十九人ガ官職ヲ止メテ、追ヒ籠メ奉ル。

（覚一本）前関白松殿の姫君とり奉つて、聽て松殿の聲にをしなる。（卷八「法住寺合戦」）

という記事を挿入して、「松殿禪定殿下ノ御聲ニ押シ成リテ」と語り、上記の延慶本の義仲をしてしおらしくも「親ト憑ミ」「親方」「子トシテ」と言わせた、「松殿の聲」という実情に相当する記事を挿入している。

ところが、「親ト憑ム」「親方」「子トシテ」と言わしめた当の延慶本では、この場面に、肝心の「松殿禪定殿下ノ御簪ニ押シ成リテ」の記事を収録していない。よつてこの段階で「親ト憑ム」「親方」「子トシテ」と言われても、読者には実態は正確には解読できないということになる。延慶本がこの娘婿関係に言及するのはかなり後の場面、「源氏方の宇治川先陣争い」から「義仲の河原合戦」に移行する、都での義仲最末期の叙述において初めてである。

本曾ハ宿所ニ歸リテ、松殿ノ姫君ヲ取りテ置キタリケル、別ヲ惜シミテ、振り捨テガタサニ打出デザリケレバ、本曾ガ仕ヒケル今参リ、越後中太家光ガ申シケルハ、「雲霞ノ如ク大勢已ニ近付キタリ。イカニカクテオハシマスゾ」トイヘドモ打立タズ。(以下略)(第五本・七「兵衛佐ノ軍兵等、付ケタリ宇治・瀬田ノ事」)

ここで初めて「松殿ノ姫君」の存在、すなわち「親ト憑ム」「親方」「子トシテ」の関係が明かされる仕組みになっている。ここまではこの問題に一度も触れてこなかったのである。他方、語り本のこの場面では、覚一本巻九(屋代本は巻九は欠巻)に、義仲が別れを惜しむ相手の女性を、

宇治・瀬田破れぬと聞こえしかば、本曾左馬頭、最後のいとま申さんとして、院の御所六条殿へ馳せ参る。御所には法皇をはじめまいらせて、公卿殿上人、「世は只今うせんず。いかがせむ」とて、手をにぎり、立てぬ願もまします。本曾門前までまいりたれども、東国の勢すでに河原まで攻め入りたる由聞こえしかば、さいて奏する旨もなくとて返す。六条高倉なるところに、初めて見そめたる女房のおはしければ、それへ打ち入り最後の名残おしまんとて、とみに出でもやらざりけり。(巻九「河原合戦」)

とあり、人物名の特定を避けて「六条高倉」「初めて見そめたる女房」と語っているに過ぎない。「六条高倉」は、義仲が入京して賜った「大膳大夫成忠が宿所、六条西洞院」から大路一つ東の東洞院大路の次ぎの高倉小路で、当初義仲が借り受けたこの「大膳大夫の宿所」は、法住寺合戦後、十二月十日から「院の御所」に提供されているから、義仲はいずれかの宿所に移動していた可能性がある。延慶本は、この女性をこの場面で、先述のように「木曾ハ宿所ニ歸リテ、松殿ノ姫君ヲ取りテ置キタリケル」と描写しているから、「六条高倉」の宿所に移してこの数カ月、目をかけてきたことになるのである。語り本では、「松殿の婿」という前述の文章を前提として、この「女房」が、「松殿ノ姫君」であろうと解することになる。覚一本は、巻一「殿下乗合」で、「松殿の御所」をはっきり「中御門東洞院」と語っており、この設定は延慶本以降どのテキストでも動いていない。姫君の生母は不明であるから、「松殿ノ姫君」をここに据え置いた「取りテ置ク」なのである。

分かりにくい取り上げ方になったかと思うが、延慶本先行説の見地から説明すると、本来、延慶本の義仲の都落ち寸前の場面で初めて明かされていたはずの「松殿の姫君」との婚姻による「松殿と義仲」の「父子関係」を、語り本は場面を早めて、師家摂政就任と関係づけて物語に持ち込んだものと解され、都落ち直前に別れを惜しんだ相手女性の素性を、語り本は臚化したのである。その理由はひとえに摂関家の娘にあらう。逆に言えば、語り本はこの女性を臚化したとは言え、松殿との婚姻による親近は不可欠であるから、上記のように、師家摂政の背景として婚姻記事を先ず投入したものと解される。これはあくまで読み本と語り本の差異発生に関する一つの推察であって、逆の解釈を退ける根拠は強くない。設定は異なるがいずれの平家物語も、入道前関白基房は、その嫡男の摂政就任のために、一人の姫君を政略の犠牲に供したと解せる組み立てを持ち込んで憚らなかったのである。

しかし松殿について、弟の慈円は『愚管抄』で次のように叙述している。

サテ義仲ハ、松殿ノ子十二歳ナル中納言（師家）、八歳ニテ中納言ニナラレテ八歳ノ中納言ト云フ異名有リシ人ヲ、ヤガテ内大臣ニナシテ摂政長者ニナリ、又大臣ノ闕モナキニ、実定ノ内大臣ヲ暫トテカリテナシタレバ、世ニハカルノ大臣ト云フ異名又ツケテケリ。サテ松殿世ヲオコナハルベキニテ有リキ。

「借るの大臣」は平家物語と符合する。しかし慈円はその背景として「松殿ノ姫君」との婚姻には言及していない。慈円の実兄兼実も『玉葉』で、次兄基房のこの復権に至る行動については比較的注意深く記録しているが、「姫君の婚姻」には触れていない。では「婚姻関係」は物語の側のでっち上げなのか。

年が變わつて寿永三年正月六日に、十三歳の摂政師家は「従二位」から「正二位」に上がる（『公卿補任』）。同じ日の叙位で義仲も「従四位下」に叙される（『吾妻鏡』）。兼実は翌日の日記に、後者について次のように記す。

又松冠者、去年直二正下二叙ス。今度四位二叙ス。

「去年直二正下二叙ス」は、去る十二月十三日「従五位上」を越えて一挙に「正五位下」を賜ったことを指すが（『吾妻鏡』）、問題は「松冠者」にある。昨年いきなり「正下」に叙され、この日「四位」に叙されたものは義仲以外に該当する者はいない。義仲は「伊予守」であるから、「冠者」はいかにも蔑称であるが、その前に付された「松」は異様である。「松」はどう見ても「松殿」の「松」以外は読み解けない。兼実は、松殿が義仲を掣取りしていたことを認知して「松冠者」と記したのである。

『尊卑分脈』の家系図において、基房子女に、該当する女性の特定しがたいことは御橋惠言の『平家物語略解』が考証している。「松冠者」に兼実式の認知を読み取るなら、『尊卑分脈』の三人の女子の内、後に後京極摂政良経室に

入り基家母となる「従二位寿子」と、八条院女房西御方で、「従三位公明室、実忠母」となる女子の間に表示される女子、「従三、伊子」は、他の二人がそれぞれ結婚相手を記している点から、あるいは「伊予守義仲」から付された呼称であつたかとの推察をゆるす。『系図纂要』は四人の女子を掲げ、四人目は「参議高能卿室」と作る。他の三人の女子の婚姻関係の明示に対して、この「伊子」のみが結婚相手不明のまま「従三位、伊子」ということになる。義仲と基房娘の結婚は、平家物語の側の情報で、場合によっては物語の設定の域をでないかも知れないが、本節冒頭に引用した松殿の義仲訓戒と、これに応えた義仲の「親方」発言は、法住寺合戦を堺に掌握した義仲の行政手腕の背後に、松殿の存在を浮かび上がらせ、逆にまた松殿の復活と子息師家の摂政就任という史的状况証拠によって、義仲との婚姻の設定は、かなり説得力のある結構となるのである。「松冠者」は、管見に触れる唯一の外部徴証である。物語は都の義仲造形と松殿一家の浮沈叙述にこの設定を不可欠としたのである。その意味付けは十分に解読されねばならない。

二 摂政関白基房と三男師家

本節で基房父子復権までの紆余曲折を把握しておく。

摂政松殿基房は、嘉応二年（一一七〇年）十月、よく知られる「殿下乗合事件」で平家と軋轢を生じ、治承三年（一一七九年）十一月のいわゆる清盛のクーデタでは、関白基房は院近臣三十九人の解任に際し、大宰権帥に左遷され、道中「鳥羽の古河宿」にて大原の本覚房を召して出家入道し（『愚管抄』）、法名は「善観」と号した（『尊卑分脈』）。出家により結局備前国への配流となる。船旅の模様はいずれの配流者に劣らず悲惨で、『山槐記』に「屋形船」と、数少ない随伴者の光景が詳細に記録されている。慈円も「松殿ハ平家ニウシナハレ」（巻七）と、この出来事の意味を

位置づけている。長子の右中將、近江權守、從三位隆忠（十六歲）も、三男の左中將、權中納言師家（八歲）も同じく解官の憂き目に遇う。

そもそも摂関家の次男であつた二十三歳の基房に摂政の任が転がり込んだのは、長兄基実が永万二年（一一六六）七月廿六日に廿四歳の若さで痼病（『公卿補任』）のために急死を遂げ、甥近衛殿基通が未だ七歳の幼年であつたといふ、いわば兄の不運によつて拾つた幸運であり、在任十三年目にして今度は彼が不運を被ることになったのである。後を襲うのは平家と二重に婚姻關係を結んで連携する今や廿歳に成長した基通である。

配流一年を経た基房の都召還に至る経緯も『山槐記』に詳しく、治承四年十二月四日、福原遷都失敗後の、清盛安德朝の打ち出した緩和政策の一環であつた。この時、かつて基房の失脚と同時に閉門蟄居を命じられていた基房の正室（師家の生母）の父前太政大臣忠雅も開門を許された⁽¹⁾。この年の十二月末には南都炎上の悲報を聞く。

帰洛後は「入道前関白」と呼ばれていた松殿が、院側近として隠然たる勢力を回復するのは、義仲の入洛を契機とする。

先に十二歳の師家の摂政拝任に触れたが、そしてこの出来事は「借るの大臣」としてよく知られ、十二歳の摂政拝任はいかにも強引な事件であるが、父松殿には、それぞれに男子（隆忠と家房）をもうけていた妻（いずれも公教女）を押しつけて迎えた新しい正室、忠雅女（忠子）に男子師家の誕生を見た日からの計略完遂の時であつた。父関白基房は、治承二年（一一七八年）四月廿六日には、七歳の師家の盛大な元服の儀式を催し、同時に「正五位下、禁色雑袍、院の昇殿を聴る」〔『玉葉』「公卿補任」〕という破格の待遇を齎し、引き続き六月七日には早くも「左少將」の官職を得させ、十月には「左中將」に昇任させている。年が変わつて三年正月十九日の除目には播磨權守に任じ、三月十一日正四下、十月七日、八歳の權中納言從三位となし、同月廿一日正三位に昇格、平安中期の藤原氏一門に例を見な

い、またさしもの平家にも前例の無い、幼少子弟への官職打ちを断行した。基房が追い上げ追い越そうとするのはいうまでもなく摂関家嫡流、廿歳に成長遂げた基通である。この関白の、目に余る無謀に待ったをかけたのが、清盛の、治承三年十一月の院側近肅正である。関白松殿が後白河院に取り入って遂行しようとした摂関家正統形成の策謀はここに頓挫する。太宰府左遷をくい止め、自らの延命のために出家入道し、やがて帰洛の日を迎える。

三 義仲入京と基房の言動

備前から帰洛して三年目、寿永二年七月、平家都落ちに際し、後白河院は叡山逃避を敢行することになるが、延慶本平家物語はこの場面を次のように伝えている。

法皇ハ鞍馬寺ヨリ、江文峠、葉王坂、篠ノ峰ナムド云フ、嶮キ山ヲ越セサ給ヒテ、横川ヘ登ラセマシマシテ、解脱谷ノ寂場房ヘゾ入セ給ヒケル。本院ヘ移ラセ給フベキ由、大衆申シケレバ、東谷ヘ移セ給ヒテ、南谷ノ円融房ヘゾ渡セ給ヒケル。衆徒モ武士モ弥ヨ力付キテ、円融房ノ御所近ク候ヒケリ。

明日廿五日、法皇天台山ニ渡セ給フ事聞ヘケレバ、人々我先ニト馳セ参リ給ヘリ。摂政殿、近衛殿、左大臣経宗卿、九条右大臣兼実卿、内大臣左大将実定卿ヨリ始奉リテ、大中納言、参議、非参議、五位、四位、殿上人、上下北面ノ輩ニ至ルマデ、世ニ人ト算ラルル輩、一人モモレズ参ラレタリケレバ、円融房堂上堂下、門内門外、隙モナカリケリ。誠ニ山門ノ繁昌、門跡ノ面目トゾ見ヘシ。

(第三末卅四「法皇天台山ニ登御坐ス事、付ケタリ御入洛ノ事」)

この時点での「摂政殿」は基通で、「近衛殿」も基通を指す。長門本は「摂政殿近衛殿」と「近衛殿」は割書である。

延慶本本文は、割書「近衛殿」が書写段階で本文化したものであろう。

摂政基通のこの日の行動については、平家一門との都落ち途中から引き返し、延慶本は「西林寺」を経て「知足院」に入ったと記し、『摂政殿ハ吉野ノ奥ヘ』トゾ申シアヒタリケル」などという風説を持ち込むので、正確な情報認識を妨げるが、史実は法皇の後を追って叡山に登っていることが、『吉記』廿五日条の「殿下登山遂げしめ給ふ」、あるいは『愚管抄』の

サテ京ノ人、サナガラ撰録ノ近衛殿ハ、一定具シテ落チヌラムト人ハ思ヒタリケルモ、チガヒテトマリテ山ヘ参リニケリ
(第五)

によって証される。同じ場面の廿五日記事について、屋代本(寛一本も同じ)には次のようにある。

法皇ハ、山門ニ渡ラセ給フト聞ヘシカバ、急ギ参ラセ給フ人々、入道殿トハ、前関白松殿、当殿トハ近衛殿、大政大臣、左右大臣、内大臣、大納言、中納言、宰相、三位四位五位殿上人、都テ官加階ニ望ヲ懸ケ、所帯所職ヲ帯スル程ノ人ノ、一人モ漏ルルハ無リケリ。(卷第八)

語り本は、登山者の筆頭に、前例の少ない人名の叙述の仕方であるが「入道殿トハ、前関白松殿」と掲げ、「当殿トハ近衛殿」と続ける。以下は形式的官職羅列で具体的人名には結びつかない。問題は「松殿基房」の行動にある。

『吉記』廿五日条に、法皇の円融房到着にすぐ続けて「入道関白殿、尊澄法印を相具し、早く参らしめ給ふ。顕家朝臣一人御供にまします」とあり、『玉葉』は廿六日条に、法性寺滞在中の兼実に定能から登山を促す書札が届い

て、これにも「入道関白」の登山が報告されている。松殿の行動の異様な迅速さが目を引く。平家都落ちという騒劇の最中に、法皇は極秘行動の都脱出、鞍馬經由の山門入りであったが、基房は院御所の動静に尋常ならざる情報通として立ち働いてその身を叡山に運んでいるのである。以降に展開する松殿基房の政界再登場の足跡に照らして、語り本が筆頭に入道殿を掲げる本文様態は極めて的確で、この「入道殿トハ、前関白松殿」という奇妙な人名表記を欠く延慶本、長門本は、あるいは誤脱かと推察され、「摂政殿、近衛殿」という誤写と関連があるかも知れない⁽²⁾。同日に山の無動寺から東塔の南谷青蓮院に馳せ参じて兼実と落ち合った慈円は、後に回想して『愚管抄』に、先の引用本文に続けて、「松殿入道も九条右大臣（兼実）モ皆ノボリ集マリケリ」と記している。この後法皇の御前で、「国王、神爾・宝劔・内侍所」奪回問題について議定が展開するが、『愚管抄』は次のように記している。

コノ間ノ事ハ、左右大臣、松殿入道ナド云フ人ニ仰セ合セケレド、右大臣ノ申サル旨、殊ニツハビラカナリトテ、ソレヲゾ用ラレケル。

慈円は常に兄兼実鼯鼠の叙述姿勢を保つが、とにもかくにもこの騒動によって「松殿入道」は院御所の議定に参画する機会を回復したのである⁽³⁾。

四 摂政師家の除目と天台座主俊堯大僧正

年が明けて一月に、粟津松原での義仲落命とともに、摂政師家の摂政としての寿命も尽きる。延慶本は第五十一「師家摂政ヲ止メラレ給フ事」で次のように記す。

廿二日、新撰政師家ヲ止メ奉リテ、本ノ撰政基通返ラセ給ヘリ。僅カニ六十日ト云フニ留メラレ給ヘリ。ホドノナサ、見ハテヌ夢トゾ覺ヘタル。栗田ノ関白道兼ト申ススハ、内大臣道隆ノ御子、正暦元年四月廿七日、関白ニ成リ給ヒテ、御拝賀ノ後、只七ケ日コソオワハシマシシカ。カカルタメシモアルゾカシ。是ハ六十日ガ間ニ除目モ二ケ度行ヒ給ヒシカバ、思ヒデオワシマサヌニハ非ズ。一日モ撰録ヲケガシ、万機ノ政ヲ執行ヒ給ヒケムコソヤサシケレ。

義仲が威を振るつた六十日間二回の除目の中身について、『愚管抄』の批評は既に引用した。その後半をここに引く。

サテ松殿世ヲオコナハルベキニテ有リキ。サシモ平家ニウシナハレ給ヒテシカバ、コノ時ダニモナド云フ心ニコソ。

慈円は腹違いとはいえ次兄の復権算段を「コノ時ダニモ」と読み取っている。と同時に、十二歳の息子を立てた父の再登板を「松殿世ヲオコナハルベキニテ有リキ」と認めている。その内容の一つを、

サテ除目ヲコナヒテ、善政トヲボシクテ俊経宰相ニナシナドシテアリシ程ニ、

と記している。これは十二月十日に催された臨時除目で、『吉記』に経房も同日に、

今日、臨時除目行ハル。善政相交ルノ由、世以テ称美、入道殿殊ニ申シ沙汰セシメ給フノ故云々。

とあり、筆頭に俊経の任参議を記している。「善政」の評価は両者符号している。義仲はこの除目で、入京当初自ら押しなっていた「左馬頭」を辞しているが、「天台座主」の人事に嘴を入れる。法住寺合戦で命を落とした明雲大僧

正の後任に、第一候補は別当権僧正昌雲、第二候補は前権僧正全玄で、世評は全玄に集まったが、誰の推薦もなく、また山門も用いずと応じた俊堯が、義仲の「殊ニ執シ申シ」により「左右無ク」補される結果となった。俊堯は村上源氏神祇伯顯仲の子息で六十六歳、『尊卑分脈』は「験者」と傍書する。『天台座主記』は「吉記」の記録どおり「僧正昌雲、前権僧正全玄等ヲ超ユ」と割書を加え、「治山歴卅日」と記す。すなわち翌年一月廿一日、義仲の滅亡とともに大衆により山を追われ、「永くその跡を削る」とある。ちなみに俊堯は二年後六十九歳で入滅する。義仲入京により大きく運命を変えられたこの俊堯と義仲はどの段階から脈絡を交わしていたのか。

延慶本は、入京直後に発生した皇位継承者問題に関与して、義仲が高倉宮（以仁王）の御子（北陸宮）に拘泥した際に、院側近の泰経から俊堯僧正が義仲の元に派遣された記事を収録している。第四・二「平家一類百八十余人解官セラルル事」の章である。義仲は高倉宮推挙の理由を問う使者俊堯に、「国主ノ御事、辺鄙ノ民トシテ是非ヲ申スニアタハズ」という謙虚な前口上に続けて、治承四年の高倉宮以仁王の挙兵の功労を称え、その子が今回の後継候補にあがらない非を難じ、またすでに賊徒に囚われの主上の弟をかつぎ出す理不尽を指摘して、しかもこれらの見解は、義仲個人のものでなく、「軍士等ノ申状」をもって言上するばかりである旨主張している。義仲にとっては、叶わぬまでも源三位頼政の養子として無念の討ち死にを遂げた実兄八条院藏人仲家への鎮魂の思いを重ねる、以仁王遺児への肩入れである。俊堯はこの趣旨を奏上し、院の議場で「義仲ガ状、ソノ謂レ無キニ非ズ」の反応を勝ち得ている。義仲の提案は決して受け入れられるものではなかったが、この直後の院殿上の除目で、義仲は左馬頭兼伊予守に任官する。俊堯の対応に義仲は心証をよくしたと受け止めることができる。『尊卑分脈』に記す「験者」についても、延慶本は、「中宮御産」の法皇の伴う験者に、房覚、昌雲両僧正に併せて俊堯法印、豪禅、実全両僧都の名前を連ねる。なお法印俊堯に関する延慶本の不可解は、成親の大將争いに際するあくどい神仏祈願において、賀茂の上の社で

「真言秘法」を行じた僧侶として「仁和寺俊堯法印」として登場する点である。仁和寺に間違いがなければ別人とするほかはないが、ここでもきわどい験者として登場している。義仲の推挙に折れて、この人物を院の側近や山門大衆の根強い反対を押して、時の摂政は大僧正に任じざるを得なかったのである。善政とばかりは評しがたい。

二回目は十二月廿一日、秋除目である。この日、摂政は実兄、松殿の子息、散位非参議の隆忠廿一歳を、権中納言正三位に取り立てる。

五 征夷大將軍源義仲

年が明けて一月一日、院の御所焼失により院の拝礼は行われず、小朝拝もなかった。延慶本は第五本の一「院ノ拝礼并ニ殿下ノ礼無キ事」の章を立てて次の文章を収録してる。

元暦元年甲辰正月一日、院ハ去年十二月十日、五条内裏ヨリ大膳大夫業忠ガ六条西洞院ノ家ヘ渡セ給フ。世間モ未ダ落居セザル上、御所ノ体、礼儀行ハルベキ所ニモアラネバ、拝礼モナシ。院ノ拝礼無カリケレバ、殿下ノ拝礼モ行ハレズ。内裏ニハ主上渡セ給ヘドモ、例年寅ノ一点ニ行ハル四方拝モナシ。清涼殿ノ御簾モ上ラレズ、解陣トテ南殿ノ御格子三間計ゾ上ラレタリケル。

延慶本は改元遡及で、元暦の年号でこの巻を記し始める。結果的に師家には摂政としての、そして義仲には生涯最後の元旦となる。「院ノ拝礼」、「殿下ノ拝礼」、「主上」の「四方拝」の叙述順序は異例である。摂政への関心が背後に滲む。物語には記されないが、六日に叙位が行われ、摂政師家を正二位（従二位を越える、『玉葉』）、伊予守義仲を従四位下に叙す（『玉葉』がここで義仲を「松冠者」と呼称することは既に触れた）。この「四位」は数日後の義仲「征夷大將

軍」宣旨の布石である。「おおむね四位の者が任用された」と国史大辞典にある。なお義仲「征夷大將軍」については、後代の編纂史書ながら『百鍊抄』は元暦元年一月十一日条に「伊予守義仲ヲ以テ征夷大將軍ト為スベキノ由、宣旨ヲ下サル」とあり、『吾妻鏡』は同月廿日条に義仲の戦死を記して略歴紹介があり、末尾は同月十日「征夷大將軍二任ズ」とある。『帝王編年記』は正月十日「伊予守義仲兼征夷大將軍」とする。

『玉葉』は十五日に朝廷内情報の伝達役として兼実の元に実直に出入りする大夫史小槻隆職から「義仲征東大將軍タルベキ由、宣旨ヲ下サレシヌト云々」の報告をうけている。兼実の批評の文言はない。「征夷」と「征東」の違いについては、兼実の記載意図は不明ながら、二種類の用語の語史はこれも歴史大辞典にたどられているが、この時代の用例としてどうあるのが正しく、語義にどう違いがあるかを結論づけることは難しい⁽⁴⁾。「征夷大將軍」そのものが長く途絶えていた職名である。同辞典は「もちろんこれ（義仲の任用）は蝦夷征討を目的としたものではなく、東国を本拠とする源頼朝の勢力と対抗するためのものである」との見解を採る。

延慶本は、平家諸本と同様にすでに頼朝の「征夷ノ將軍」宣旨を、これは史実を組み替えて語ってきたが、義仲の場合は第四・四「義仲、征夷將軍タルベキ宣下ノ事」の一章を立てて、

十一日、義仲再三申シ請クルニヨリテ、ナマシキニ征夷ノ大將軍タルベキ宣下セラル。

と語る。章題は頼朝と同様「征夷將軍」で、本文では「征夷ノ大將軍」とする。「再三申シ請クル」に、義仲の執拗な要請のあったことを表し、穏やかならざる鎌倉の動きへの対抗策として「征夷大將軍」拜任が最強の方途であったことがうかがえ、「ナマシキニ」に、この宣下がいかに世評に反する無理な運びであったかが端的に表明されてい

る。先に触れたが一月六日に摂政師家が義仲に四位下の叙位を許したのは、征夷大將軍の前提条件であったという点から見て、背後に故実に長けた入道関白松殿基房の存在の透けて見える采配でもあった。

六 基房一家の晩年

義仲入京後の基房について、『愚管抄』で、異母弟慈円は次のような所感を漏らしている。

松殿ナンド程の人モ、カクテ木曾ガ世ニテ世ヲナガクシランズト思シケルニヤト、返々口惜シキ事也。九条殿ハウルセクソノ時トリ出サレズシテ、松殿ニナリニケルヲバ、事ガラモ十二歳ノヲモテ方コソアサマシケレド、松殿ノ返リナリタルニテコソアレトテ、イミジイミジトテ、我レノガレタルヲバ、仏神ノタスケト悦バレケリ。(第五)

慈円の所感はそのままその同母兄(『系図纂要』の傍書による)兼実の所感として書かれている。「カクテ木曾ガ世ニテ世ヲナガクシランズト思シケルニヤト」には、松殿の誤算を言い当てた観察がある。

あるいはまた『愚管抄』は次のようにも見ている。

松殿ノ子ニ家房トイヒシ中納言ゾヨクモヤトキコヘシヲ、卅ニモオヨバデ早世シテキ。(第七)

家房にはこの年、卅四歳大納言正二位の長兄・隆忠がいたが、慈円は摂関を負うという意味での「ヨクモヤ」との評価を与えていない。

基房はこれより、まず承久二年(一二二〇年)九月六日に北の方忠子を亡くし(忠子を生母とする天台座主承円がこの

日服喪―『華頂要略』、寛喜二年（一二三〇）十二月まで、八十六歳の長寿を保つので、承久の大乱を目の当たりにしたばかりではなく、將軍も源家三代を経て、藤原氏將軍九条頼嗣の誕生をその目で見ることになる。自らが義仲と結託して手を初めて復活させた征夷大將軍権力の、それは予測を遥かに上回る、時代の権力構造の激変といわねばならない。松殿の家は残念ながら日記を誰一人として残していない。平家物語がかつて、左右の大將の前例の最後に掲げた、有名な「兄弟左右」「松殿基房・月輪殿兼実」の、それは一方の寂しい末路である。

家系の復活を願いつづけた基房の、最後の心残り、娘の婚家先き探しであつたらしい。正治二年（一二一〇年）七月十三日、時の左大臣良経の室能保女が産後三日目に他界し、慈円の筆によると、

サルホドニ、松殿ノ、ムスメヲサヨウニモイワレケレバ、次ノ年建仁元年十月三日ムカヘラレニケリ。年ハ廿八ト聞コヘキ。

とある。「サヨウニモイワレケレバ」の主語は「松殿ノ」である。「サヨウニモ」に娘の婚家を巡る松殿の思案がにじむ。先に「寿子」と掲げた師家同母の女子である。慈円はわざわざ「年ハ廿八」という『玉葉』は承安四年四月十八日にこの女子の出生を記している。撰関の子女としては異例というわけではないが晩婚である。ちなみに良経は二年後撰政を拝任し、その翌年には寿子も男子基家を産するが、結婚六年目に良経は突然死を遂げる。慈円はここで再び松殿に言及している。

（良経は）松殿ノムスメ北ノ政所ニセラレタリキ。撰録（良経）ノ、ヤガテ撰録（松殿）ノ掣ニナルモアリガタキ事ニテアリケレバ、サキノ入道殿下ヲ二人（兼実・建仁）二年出家、法名「円証」と基房）ナガラ、親・舅ニテモタレタレバ、公事ノ道、職者ノ方キハメタル人ノ、昔ニ過ギタル詠歌ノ道ヲキハメテ、コノ宴（曲水の宴）ヲコサルル然ルベシト人モ思ヒツツ、心ヲ

トキ、目耳ヲタテツツアリケル程ニ、三月七日ヤウモナク寢死ニセラレニケリ。天下ノヲドロキ云フバカリナシ。

一年後に後を追うことになる兼実の落胆はもちろん、松殿の落胆もまた目に見える如くである。基家の方は、これも実朝没後の将軍選びの記事の中で『愚管抄』の語るところであるが、

ソレ（基家）ヲ院（後鳥羽）ノ子ニセントテ、メシトリテ、忠綱ニヤシナハセラルル有リ。ソレヲ、ヲトナシクモアリ、将軍ニクダシ申サムナンドカマヘテ、ソラ事ノミ京・田舎ト申シケルモ聞コヘケリ⁽⁵⁾。

とあり、忠綱は信用のならない「ソラ事」師⁽⁶⁾であつたらしいから、内容も信用出来そうにないが、その命運には穏やかならざるものがあつたらしい。外祖父松殿在世中の出来事である。後鳥羽院の指金で、晩年の松殿は外孫の将軍就任という、はかない夢も見人であつた。基家は順徳天皇時代に侍従に取り立てられ、極官は内大臣正二位に上る。母寿子も九条家では「鶴殿」と号される。若くして六十日摂政を拝任して再び任官することのなかった長兄師家の不運に比べて、結婚生活は短期間に終止符が打たれたとはいえ、実子が廿歳、権大納言正二位に至る段階までを見届けるが、父基房より早く、貞応元年（一二三二年）、四十九歳で生涯を閉じる。

『明月記』は寛喜二年（一二三〇年）十二月廿九日に、基房の死亡記事を次のように記す。

昨日、申ノ時、木綿禪閣遂ニ入滅シ給フ云々。法性寺殿（忠通）二男、仁安元年七月摂政、廿二、三年二月旧ノ如シ、二代。承安元年閏白、治承三年十一月有事ニ通世シ給フ、卅五。五十二年、春秋八十六。周防・筑前両国彼ノ御分ト為ス。子息前摂政入道、前左大臣、隆（忠）、大納言忠房、興福寺前别当大僧正実尊、前天台座主僧正乗円、其ノ外法印又両三人歟。

「木綿禪閣」だけは新しい情報であるが、煩を厭わずその略歴の全文を引用したのは訳がある。定家はこの略歴の末尾に割書で「非名誉人」と小さく記しているのである。痛烈な批評である。定家にはどの点がこの文言に当たるかは敢えて書かない。しかし本稿で取り上げた松殿の一齣一齣の事績が、定家のこの四文字を裏書きするのではない。異母弟の兼実、慈円は既に世になく、張り合った甥基通が後を追うのは三年後、父の名誉欲の犠牲に供された三男師家が長すぎた半世紀の余生を生きて六十七歳で生涯を閉じるのは、父の死より八年後のことであった。全て義仲の入京の惹起した悲喜劇の顛末である。

註(1) 『愚管抄』には基房の妻についての次のような指摘がある。

コノ松殿ハ撰録ノ後、年比ノ北ノ方三条ノ内大臣公教ノムスメニ髣トラレテ、ソノ子共実房、実国ナドナド云フ人々トモシテ沓トリ簾モタゲテ、法性寺殿ノ存日ヨリノコトニテイミジカリケルヲ、花山大相国忠雅ムスメヲモチタリケル、撰録ノ北政所ニナシタガリテ、髣ニトリ申シテケリ。世間ノユユシキ沙汰ニテ、最愛ノ中ニナリテ、師家ト云フ子ウミテ、八歳ニテ中納言ニナシテ、カカルコトドモ（註―「殿下乗合事件」を指すが、この事件は師家出生以前の出来事である）出キニケリ。

(2) 四部合戦状本「入道前関白殿、当時撰政殿、左大臣経宗、右大臣兼実、内大臣実定ヨリ始メ」とある。

(3) 源平盛衰記「入道前関白松殿、当時撰政内大臣基通、左大臣経宗、右大臣兼実、内大臣実定以下」とある。

(4) 因みにこの記事の前に『玉葉』に松殿が登場しているのは、前年十月廿一日、大嘗会御契行幸の記録で、詳述を極める年中行事記録の中に、「伝へ聞く、関白入道見物せらるると云々。然るべからざる事か」とある。実兄とはいえ出家者の神事見物を厳格に咎める姿勢がうかがえる。松殿は政界から消えていたも同然であった。

比較的に近い文献では『古事談』（和洋女子大学附属図書館蔵本・新日本古典文学大系による）巻第四の六に「賜征夷大將軍右衛門督藤原忠文節刀」がある。これが直近過去の史実で、『日本紀略』後篇二朱雀・天慶三年二月八日条に「天皇、南殿ニマシマシ、征東大將軍參議右衛門督藤原朝臣忠文ヲ發遣シ、節刀ヲ賜フ」によって確認できる。『紀略』は

「征東」であるが、『古事談』は「征夷」とする。〔扶桑略記〕は「征夷大將軍」とする。故実に堪能な兼実は『紀略』を踏まえて「征東」を使用したか。それより以前の例では延暦十六年の坂上田村麻呂「征夷大將軍」は著名である。後代では『神皇正統記』が義仲を「征夷將軍二任ズ」、頼朝には「征夷大將軍二拝任」と表現している。区別の意図は定かではない。

(5) この場面、『愚管抄』本文には解釈上問題がある。本文は古典大系本、岩波文庫本のいずれも、

「故後京極殿（良経）の子・左府ノオトド（この場面での左大臣殿は良経の嫡男道家）ハ、松殿ノムスメ北政所ノ腹ナリ」

とある。しかし「道家」は「松殿ノムスメ北政所ノ腹」ではなく、日本古典文学大系『愚管抄』の頭注は、「道家異母弟内大臣基家のことを誤記したのであらう」とする。しかし慈円が九条家の人物について誤記するとは考え難い。また「道家」は何度か登場するが「左府ノオトド」と呼ぶ例は無い。本文の「左府ノオトド」は「左府ノオト」の誤写ではないか。「左府道家の弟基家」母は「松殿ノムスメ」である。なおこの奇策に、松殿がどのように関与していたかは不明。

(6) 「忠綱」（『尊卑分脈』によると藤原氏内麻呂十五代目の孫、内蔵頭、播磨守、伯耆守、正四位下、兵庫頭、左馬頭、母は藤盛資女、大学允）については、『愚管抄』はこの場面より少し前で、後鳥羽院近侍者として、次ぎのように紹介している。

コノ間ニ院ノ北面ニ忠綱トテ、メシツカイテ、誠ニサセルコトナキ者ノ、真名ヲダニシラヌヲ、人従者ニテ、諸家ノ前駆ガ党ナリケリ。ソノカミ、位ノ御時ヨリ候ヒナレテ、近ク召シツカイケルユエニ、内蔵頭殿上人マデナサレタルヲ御使ニテ（以下略）。（大将の任官を巡って、後鳥羽院は忠綱を使者として大納言公経の元に派遣したが、その人物紹介の場面である）

また、論文中に引用した場面の直前に、建保七年八月の後鳥羽院の発病を語り、『愚管抄』は次のように忠綱解官の経緯について記録している。

〔院〕「ヨクヨクシツカニ物ヲ案ズルニ、此ノ忠綱ト云フ男ヲ、コレラナドニ殿上人、内蔵頭マデナシタルヒガコトコソ、イカニ案ズルモ取リドコロモナキヒガトナリケレト、サトリ思フナリ」トテヤガテ解官停任シテ、御領国サナガラメシテステラレニケリ。スコシモ心アル人々ハ殊勝々々ノ事カナトオモヘリケレバニヤ、其御悩無為無事ニ御平癒ア

リケリ。

忠綱の言動背景はよくわからないが、「卿の二位・兼子」が院に忠綱赦免を申請する動きのあったことが『愚管抄』に批判的に叙述されているから、忠綱の後ろに兼子がいたらしいことは確かである。忠綱は解官より五ヶ月前の『吾妻鏡』建保七年（承久元年）三月九日に、上皇使者として鎌倉に下向し、実朝の弔問に合わせ、後に承久争乱の原因となった『摂津国長江倉橋両庄』の地頭職改補の院宣を伝達している。『玉葉』には建久年間の出来事ではあるが、院近侍者として傍若無人の振る舞いのあったことが記されている。院が忠綱を鎌倉使者として重用したのは、忠綱の曾祖父実義の姉妹が六条判官為義の母であったことによるのではないか。

（たけひさ つよし・関西学院大学名誉教授）